■証言：戦後社会党・総評史

太田薫氏と労働運動を語る

――塚田義彦氏に聞く

――今日は塚田さんからご報告をいただきます。「太田薫氏と労働運動を語る」ということで，１時間半ほど，太田さんのそれぞれ注目されるような動向や業績とのかかわりでお話をしていただければと思います。その後，質疑とさせていただけたらと思っています。

時代背景等は皆さんご存じであることを前提にして，傍から，あるいは内側から見たお話をしていただければと思います。太田さんと高野さんの違い，総評の発足の経緯や背景，太田―岩井ラインの形成，あるいは60年安保の前になりますが，下呂談話や日本的労働組合主義という新しい路線の定義，さらには64年の太田・池田会談。これは非常に注目されることですが，その後も東京都知事選へ立候補を表明されたりしている。あるいは総評から連合に至る過程での，総評３顧問の方による労研センターの発足。これも太田さんがかなりの役割を果たされたのではないかと思います。このような注目すべき事柄がたくさんありますが，労働運動以外でも太田派協会の設立というようなことがあります。後ほどそういう事柄を含め，もしご報告で十分触れられない部分がありましたら質問していただければありがたいと思います。

はじめに

塚田　塚田義彦です。私は自分史を３冊ほど出していますが，お手元に差し上げましたメモのもとになっているのは，2006年に出しました『太田薫さんと私――合化労連書記局の窓口からみたもの』（非売品）という本です。これは当時，大原社会問題研究所からも寄贈してくれということで１冊お送りしましたから，あるいは書庫の片隅にあるかもしれません。この『太田薫さんと私』という本を中心に報告します。何しろ，もう87歳ですからね。記憶は相当薄れてきています。病気もたくさんして，入退院を繰り返しています。何とかしぶとく生きてはいるのですが，年とともに知能指数なども低下してきており，初期の認知症ではないかと自覚もしています。

話に入る前に，左とか右とかいう人物の評価ですね，私はこれ，大嫌いなんですよ。人間を左とか右とか決め付けることはできないという考え方の持ち主ですが，説明はしやすいですよね。この人は右であるとか左であるとかいうふうに決め付けると，それでその人物が分かってしまったような気がするわけです。

本稿は，2014年５月18日（日）に，法政大学市ヶ谷キャンパス80年館円卓会議室において開催された，第13回社会党・総評史研究会の記録である。参加者は，雨宮昭一，有村克敏，五十嵐仁，岡田一郎，芹澤壽良，園田原三，土谷一雄，中根康裕，浜谷惇，細川正，山口希望，米山忠寛，木下真志であった。

読者の便宜を考慮し，適宜中見出しをつけた。（木下真志）

一例を挙げると，新産別（全国産業別労働組合連合）という，労働四団体の一つの組織がありました。これは連合ができる中で総評と一緒に消えていくわけですが，新産別というのはその形成の過程から言えば大右の右です。しかし，新産別がずっと右の立場を堅持し，維持してきたかというと，歴史をよく調べてみるとそう単純でもないのです。これは80年代ですが，総評，同盟（全日本労働総同盟）などが労働戦線統一問題でいろいろ対立をしていく中で，どちらかというと総評に近い立場です。ですから，分かりやすく言うと，まあ，真ん中と言えないこともないのですが，左のほうに新産別が偏ってくる。ですから，新産別は同盟とはあまりいい関係にはなかったと考えています。そういう点で，左右の別というのを私も使うわけですが，これはよほど考えて使わないと，その人間の評価を誤ることになると思います。

さて，私の略歴です。私は戦争中に，長野県松本市の旧制松本中学を卒業したというだけの学歴です。したがって，戦後の教育，特に大学教育を全く受けていません。そういう意味では，経済も法律もよく知りませんし，無学無教養の人物と自分でも思っています。当時も労働組合の書記局で働く書記は大学卒が圧倒的でした。８～９割まで大学卒で，私のように大学を出ていない人間は本当に少数になっていました。そういう人間が太田薫（1912～1998年）さんと一緒に行動を共にしたということで，今日お話をすることになるわけです。私なりに自分の評価をすれば，典型的なイエスマンであった（笑）。太田薫さんの経歴は後で詳しく述べるわけですが，太田さんが「右向け」と言えば右，「左向け」と言えば左，そのような40年ぐらいでありました。

太田薫さんとの出会い

太田薫さんとどこで出会ったのかというと，私が労働省の労働基準監督官として岡山の労働基準監督署にいたとき，鉄鋼労連（日本鉄鋼産業労働組合連合会）の千葉利雄さん（1927～2009年）という企画調査部長の紹介でした。50年の秋，総評ができた年です。当時，千代田区三崎町に炭労会館がありました。今はもう炭労（日本炭鉱労働組合）はなくなっていますが，この炭労会館でお話をして「合化労連（合成化学産業労働組合連合）に来ないか」と言われ，「はい，行きます」と一決してしまった。

この千葉さんという人は鉄鋼労連の企画調査部長を長くやり，副委員長をやり，最後は連合（日本労働組合総連合会）が形成されるときの政策委員長をずっと長く，10年前後やったと思います。ですから，連合の政策は千葉さんがつくったと言って差し支えありません。連合の前身である全民労協（全日本民間労働組合協議会）のときから政策にタッチされているわけで

塚田義彦氏略歴

1926年11月　長野県生まれ
1944年３月　長野県松本中学校（現松本深志高校）卒業
1945年８月　旧満洲国立ジャムス医大２年終了
1946年11月　帰国
1947年１月　長野県庁学務課勤務，教職員適格審査従事，県職の一員２．１ストに
1948年８月　人事院事務総局健康課勤務 公務員衛生管理業務従事
人事院職員組合結成参加，執行委員
1950年４月　労働省労働基準監督官，岡山監督署勤務
1951年１月　総評合化労連書記，調査部勤務，調査業務
1958年７月　合化労連中央執行委員，調査部長
1972年７月　同書記長（以降８年間）
1980年７月　同副委員長（以降４年間）
1981年　中央労働委員会，労働者委員（以降４年間）
1982年９月　総評民間単産会議事務局長（以降３年間）
1985年11月　定年退職

す。千葉さんとなぜ知り合ったのかというと，私は労働省へ行く前に人事院にいました。人事院の職員組合を立ち上げたのですが，このときに千葉さんと一緒になりました。いわば人事院の同僚と言っていい。しかし，千葉さんは東大経済学部を出たエリート中のエリートですから，私などと比較することは難しい。

当時，高野実（1901 ～ 1974年）さんが総同盟（日本労働組合総同盟。同盟の前身）の総主事。総主事というのは総同盟の用語で，書記長のことを言います。高野さんが総主事の立場のときに，千葉さんは総同盟の調査部に入りました。調査部長は清水愼三（1913 ～ 1996年）さんです。日本福祉大や信州大学の先生を務められた清水愼三氏と一緒に人事院から移って働いていました。そして，私に総同盟に遊びに来いということで，よく総同盟の会館に行きました。当時は東京・三田にありました。今は日本労働会館とか言っていますが，そこにあった総同盟に行き，人事院の同僚だったという関係で千葉さんとは親しい関係にありました。

当時研究会がありまして，その主催をされたのは，確か前田さんとおっしゃいました。まだ新日鉄（新日本製鉄㈱）になる前で，八幡（やはた）製鉄と富士製鉄が別会社でしたが，八幡の本社の調査部長という方（千葉さんの伯父）が司会をして，国会の議員会館でよく会合を持っていました。これに集まったのは新産別の人たち，それから全自動車（全日本自動車産業労働組合）の方々，あるいは学者では高橋正雄先生。向坂逸郎先生はあまりお見えになりませんでしたが，今から考えれば，これは社会主義協会の前身であったような気もします。そこへ私も１年ほど参加，といってもただの一会員ですが，そういう学者や労働運動家の話を聴く機会があり，私も労働組合について，ある程度の知識を持つことになります。

総評ができるのは朝鮮戦争の年，1950年ですが，この総評ができるときに新しい労働組合組織が幾つもできました。合化労連は太田さんの組織。鉄鋼労連は清水さんが書記長をやられました。それから，当時，全逓（全逓信労働組合）などは分裂していました。今までの全逓が弾圧されて宝樹文彦（1920年～）さんなどが新しい全逓をつくり，新全逓のほうが次第に優勢になっていくという時代でした。このときに千葉さんは，「あなたは労働組合で働く気があるか」とおっしゃる。「ええ，ありますよ」「それじゃ，どこにするか。全逓にするか，合化労連にするか，鉄鋼労連にするか。でも，鉄鋼労連は俺が行くつもりだからな」（笑）。鉄鋼労連は断られて，宝樹さんのところへ行くか，太田さんのところへ行くかという話になったのです。

私は長野県庁から人事院，労働省と公務員は少しやっていましたが，「どうも公務員という世界は東大卒が巾をきかせていていささかなじめないな。あまり長く経験したわけではないのですが，やはり民間のほうがいいや」と思い，太田さんを紹介してもらい，合化労連に採用になりました。合化労連も1950年，総評と同じ年に結成されています。「今年中に結成するから，来年１月の初出勤の日に来なさい」ということで，1951年に合化労連書記局に入っていくわけです。

総評の結成

さて，ここで話を少しさかのぼり，総評の結成という問題に入っていきたいと思います。日本が戦争に負け，マッカーサーが改革指令を出したなどということは，もう言う必要もないくらいです。1946年３月といいますから，戦争が終わって間もなく，アメリカのフルトンというところで，W．チャーチル（1874 ～ 1965年）元イギリス首相が「鉄のカーテン」という有名

な演説をしました。「北のほうはバルト海，南のほうはアドリア海まで，ずっとソ連によって鉄のカーテンが下ろされてしまった」というチャーチルの有名な演説です。ここをもってすぐ冷戦が始まったというのも少し言い過ぎですが，このころから米ソの対立というものが次第に目立つようになります。

マッカーサーの政治というのは，ご承知のように軍閥，財閥は解体したのですが，天皇を含む間接統治で日本の官僚機構をそのまま残して利用したという占領政策でした。このときに労働組合も結成が奨励されましたが，1946年８月，当時の中央全国組織ができます。後で労働戦線統一問題が出てくるとナショナルセンターという言葉が一般的になります。しかし当時，ナショナルセンターという言葉を私は聞いたことがありません。全国中央組織と言っていたと思います。総同盟も産別会議（全日本産業別労働組合会議。新産別は産別会議から分かれた）も46年８月に結成されます。人数的に言うと，それぞれ自称だと思いますが総同盟は85万５千。産別会議は163万といいますから，戦後のいっときは産別会議のほうが勢いは良かった。十月闘争（1946年，産別会議の指導によって行われた，傘下12産業別組合の共同闘争）というようなこともありました。そして，総同盟と産別会議という二つの組織が競合する形の中で戦後，スタートするわけです。

２．１スト，総同盟をめぐって

しかし，間もなく２．１（にいち）ストライキ[1]への弾圧もありました。私はこの２．１ストライキに偶然出くわしているのです。長野県庁にいたときです。２．１ストというのをやるのだという話です。私は当時，学務課というところにいたのですが，あの２．１ストがどうして起きてきたのか，組合員にほとんど説明はなかったような気もします。長野県庁の学務課は教職員を取り締まるところですから，県庁職員組合組合員の一部ではあっても２．１ストなどということをあまり大げさに言わなかったのかもしれません。

私の父親は教員で，長野県市教組の委員長でした。ですから，我が家は長野市の県庁のすぐ傍にあったのですが，教職員組合の役員やら活動家が我が家に毎日のようにやってきて，ワンワンガンガンやっている。ですから，我が家は何か２．１ストの雰囲気ですが，私の職場へ行くともう本当に静まり返っていて，どこに２．１ストがあるやら分からないという状態で２月１日を迎えます。これはご承知のように前日の１月31日，マッカーサーの中止命令が出ます。当時はテレビがありませんで，ラジオでスト中止指令を聴きました。国労（国鉄労働組合）出身の伊井彌四郎（1905 ～ 1971年，法政大学経済学部卒）さんという共闘会議の議長がラジオで，「マッカーサーの指令には従わざるを得ません。一歩退却，二歩前進」と言われた。これはよく文書にも出ています。

当時，総同盟は原虎一（1897 ～ 1972年）さんという，どちらかというと右派グループの人たちが書記局を握っていましたが，総同盟自体が左へ寄って，先ほどの高野実さんが総主事になり，高野さんの時代が長く続きます。そして，総評を結成することになります。朝鮮戦争の話は詳しく言う必要はないと思いますが，このときに逆コースということで日本全体が右傾化の嵐に見舞われます。

そのときに占領軍は何を考えたかというと，「産別でも総同盟でもない」，新しい全国組織を

(1)　昭和22年（1947）２月１日に予定されていたゼネラルストライキ。激しいインフレによる労働者の不満を背景に，全官公庁共同闘争委員会が結成され，数百万人参加のゼネストが計画されていたが，連合国軍最高司令官マッカーサーの命令で中止になった。

つくろうと指導しました。ですから，総評は明らかにGHQの肝いりでできたわけです。それに総同盟の高野さんが同調しました。高野さんにしてみれば，占領軍にそれほど協力するつもりもなかったのかもしれないけれども，「いや，まあ，占領軍がつくるというのだから，これを利用してやれ」とお考えになったのだと思います。朝鮮戦争のさなかに総評の結成大会が開かれ，議長には炭労の武藤委員長，事務局長には東交（東京交通労働組合），産業別で言うと都市交（日本都市交通労働組合）の島上善五郎（1903～2001年）さんがなります。この結成大会では，「北朝鮮の武力行使反対，平和的，民主的手段によって社会主義を実現する」ことをうたっています。当然と言えば当然ですが，高野さんに協力したのが我が太田さんであり，清水慎三さんでありました。総評の結成準備をすると同時に，合化労連も鉄鋼労連も形成されていくことになります。

諸組織の変遷

このころ，東西の冷戦が次第に……。何しろ朝鮮戦争（1950～1953年）で火を噴いていますから，冷戦と言ってもかなり熱い戦争になっていたわけですが，社会党に続いて総評も全面講和，中立堅持，軍事基地反対，再軍備反対という「平和四原則」を掲げることになります。そして，総評はイギリスで開かれたICFTU（国際自由労連）の結成大会に，占領軍の手引きで主要なメンバーを参加させています。当時，外国へ行くのは自由ではありませんでしたから，占領軍の係官が連れて行ってくれたわけです。ですから当然，ICFTUに加盟すると思われていたら，内部で反対論が出て，一括加盟廃案になってしまいます。WFTU（世界労連）が分裂して国際自由労連（ICFTU）ができたのですが，ICFTUにせよWFTUにせよ１国１ナショナルセンターが原則です。ですから，産業別の加盟ということは，規約上はあり得ないのですが，それを強引に押して，日本の加盟組合はICFTUに一括加盟をしなかったのです。総評は51年の大会で一括加盟を廃案にしています。そして，２回目の大会で高野さんが島上さんに代わって事務局長になります。

総同盟はこういう総評のやり方に反対でありましたから，ICFTU加盟も当然だということで，総同盟の再建大会などを開いています。このときに，今まで民同という形であったものが，右派は民労研，左派は同志会ということになります。同じころ，山川均さん，向坂逸郎さん，大内兵衛さんも呼び掛け人だったと思いますが，高橋正雄さんとか，こういう学者グループを中心にしながら，岩井章（1922～1997年），太田薫，高野実なども参加して社会主義協会もできます。

この年（1951年）に，サンフランシスコ講和条約と日米安保条約が吉田首相の主導の下に調印されていきます。民同は左派と右派とに分裂をしたのですが，総評は，「この講和条約は片面講和である，全面講和ではない，ソ連や中国が入っていないじゃないか」ということで反対して，平和推進国民会議（平推会議）というものを組織しました。今から考えると本当に不思議なことで，９月１日に結成総会をやるのですが，靖国神社でやったのです（笑）。靖国神社の境内を借りて，平推会議を開催しています。吉田首相は逆コースをぐんぐん進めていきますから，総評は労働法規改悪反対闘争，労闘ストというようなものを組みます。労闘ストはそれほどストライキをやったわけではありませんが，戦後，レッドパージもあり，労働組合は意気士気が非常に沈滞している中で，こういう政治闘争ですよね。政治ストを公然と唱えるところまで来たものですから，少しずつ労働組合は

立ち直ってきたということが言えようかと思います。

同時にまた，太田さんは宇部窒素という山口県の化学工場の出身ですが，この宇部窒素で合理化があり，首切りが出ます。太田さんも174名の解雇の中に含まれていましたが，長期のストライキをやって撤回させます。それから，労闘もストライキをやったのですが，途中で政府と妥協しかけてストライキを中止します。そのために武藤炭労委員長・総評議長はクビになってしまうというような形でした。

血のメーデー事件

この年は血のメーデー事件がありました。血のメーデーはご承知と思います。共産党の軍事方針の表れではないかという説もありましたが，私の見るところ，それほど計画的なものだったとは言いにくいと思います。私は普通のメーデーに参加して新宿で解散し，皇居の前までバスでやってきて松の木の下で眺めていた。いわば野次馬ですよね。見ていたのですが，デモ隊がスーッと門に入ってきました。警視庁の真ん前の桜田門です。そこを入ってきたら，守っていた警官隊がサーッと道を開ける。ですから当然，何の抵抗もなく何千人というデモ隊がずっと皇居の前に入って行ってしまう。そして，「俺たちは皇居を占領したあ」とか言って喜んで，赤旗振って，プラカードを振りかざして威張っていました。そうしたら，警察がいきなりガス弾を撃ち始めた。ガスを利用したというのは後には出てきますが，当時は初めてではないかと思います。

ガス弾は弁当箱のようなものです。それを鉄砲のようなものでポーン，ポーンと撃つ。デモ隊のところに落ちるでしょう。落ちたらデモ隊が拾い，その弁当箱のようなガス弾をそのままま た警官隊のほうに投げ返す(笑)。そうすると，これはくしゃみガスだと思いますが，警官隊もぽろぽろ泣き出す。双方相討ちになってしまった（笑)。だから警官隊も困ったのでしょうね。しかし，それにしても乱暴ですよね。いきなり実弾発射。デモ隊に向かって実弾をピストルで撃った。ですから，死人も出ました。けが人も出ました。デモ隊はクモの子を散らすようにダーッと，大手門のほうへ向かって逃げていきます。我々も松の木の下で眺めていたのだけれど，「眺めている場合じゃないね」ということで，みんな有楽町へ有楽町へと逃げて行った記憶があります。

これは当然，メーデー実行委員会の枠を外れた行動ですから，メーデー実行委員会はこの血のメーデー事件を非難する声明を出します。そうしたら，不思議なことですね。高野さんは機関紙『総評』の１面を使い，「この血のメーデー事件は日本民族の怒りである」と抗議を発表する。さすがにこれは総評常任幹事会で問題になったのではないかと思いますが，高野さんという方は本当に後でもいろいろ理解に苦しむような行動があります。当時，太田さんと高野さんは一緒に総評をつくった仲ですし，三田にあった合化労連の書記局に夕方，太田さんと話し合うために来られて，「戦前，俺は共産党員だったんだよ」という話をよくされました。それだけではありません。今から考えると本当かどうかと思うような話ですが，当時，共産党には日本経済について分かる人間がいなかった。したがって，勉強をするのに大変困ったというような話もされていました。共産党と労農派との間には有名な論争もあるのですが，そういうことはあまり話をされませんでした。

ともかく総評は，「賃金綱領」を第３回大会でつくりました。「賃金綱領」というのは，ご覧になった方もいらっしゃると思いますが，この原案をつくられたのは鉄鋼労連におられた生

活専門家の永野順造さんです。長い長い文章でみんなあきれ果てて，賛成も反対もなかった(笑)。弱り果てていたら同じ鉄鋼の千葉さんが，これを要約した「賃金綱領」にしました。当時，平均賃金は１万円前後ではなかったかと思います。私自身は8000円という賃金だったことを覚えていますが，これを戦前回復，２万5000円にしようというのが当面の目標。同時に最低賃金は8000円。これを二つの大きな柱にして，全物量方式（マーケット・バスケット方式）などを採用して「賃金綱領」を掲げました。

当時のストライキ・首切り，不破さんのこと

この年に炭労と電産(日本電気産業労働組合)のストがあります。当時はまだ，石油がエネルギー源として大きな比重を占めていませんでしたから，炭労，電産のストライキはやはり国民経済に影響はあったと思います。炭労はそれなりに処理できたのですが，電産は分裂させられてしまいます。分裂が始まったのは中部電力からですが，全国的に広がって電力労連（全国電力労働組合連合会）という形に再編成され，電力労連は後で言う連合形成のときの有力組織となります。

それと同時に，自動車の生産が始まったばかりでした。占領軍はずっと長い間，自動車の生産を許可しませんでしたが，この前の年ぐらいに自動車の生産が開始され，トヨタとか，日産とか，いすゞとか，こういう工場が動き始めます。自動車の組合に益田哲夫(1913～1964年)という人がいました。「マステツ」と言っていましたが，これがまた優れた指導者だったのでしょう，日産自動車の賃上げを指導しました。しかし，第二組合ができ，日産自動車の労働組合は塩路路線になっていきます。後で，塩路一郎（1927～2013年）さんという人は労働戦線統一の中で大きな役割を果たすことになります。日産の組合が一部あまりに借金をしたものですから，とうとうトヨタ，いすゞなどを含めた全自動車が解散に追い込まれてしまいます。

それから，三井鉱山で首切りがありました。三井鉱山では三池が中心ですが，113日も長期のストを闘って首切りを撤回させました。この三鉱連の首切り反対闘争の勝利は本当に珍しいのです。首切り合理化反対闘争で勝利したのは，前年の宇部窒素の首切り反対闘争に勝利をしたのと，この三鉱連（全国三井炭鉱労働組合連合会）の勝利ぐらいしか私の記憶にありません。

三鉱連はどちらかというと高野さんの指導を受けたわけではなかった。このころ，高野さんは後で言う「構造改革論」に近い「労働プラン」などという，イタリアから入ってきた考え方を提唱して，平和経済会議運動をすすめます。さらに，これも高野さんらしいと言えば高野さんらしいのですが，重光葵（1887～1957年）を総理大臣にしようとします。重光は戦争中の閣僚で，戦犯の一人でした。後には岸信介なども総理大臣になりますが，当時，「重光首班論」などというのは想像もつかないような提唱ですよね。ですから，総評の中でも批判があったし，社会党も受け入れることはありませんでした。こうして高野さんは全自動車で失敗し，尼崎製鋼や日本製鋼室蘭とか，こういうところの争議に失敗をして，どちらかというと総評の中での指導力が問われることになります。

話はまた変なところへ行くのですが，当時，鉄鋼労連に不破哲三（本名 上田健二郎，1930年～）さんがおられました。いま共産党の社会科学研究所所長ですが，同じ会館にあった鉄鋼労連の書記でした。案外，長かったです。十何年もやられていました。そのころ，どういうわけか，総評の組合の全書記が集まった学習会がありました。その学習会に向坂先生をよんだ。向坂先生が一通りのことをしゃべったら，不破

さんが立ち，戦前の労農派との論争を繰り返したのです。そうしたら向坂先生，真っ赤な顔をして怒ってね（笑）。「何を言うか！」という調子で不破さんをやっつけるのですが，不破さんは平気な顔で，全然赤い顔もしないで向坂さんとやり合っていたことをよく覚えています。そのころから不破さんは，鉄鋼労連の書記ではあったのですが，共産党の『前衛』などに論文を書かれているという話でした。

その後の労働運動

1954年，先ほど言いました尼崎製鋼や日本製鋼の争議が敗北し，近江絹糸の争議は同盟の指導の下で勝利をしましたが，第５回大会を開きます。第５回大会では高野さんが140票，太田さんが107票で，高野さんの勝利でした。勝利ではあったのですが，同時に総評の役員・常任幹事は，高野派が少数派，太田派が多数になるような形で役員構成が決まっていきます。この年に太田さんが５単産(産業別単一労働組合。同一の産業に従事する労働者を，職種の区別なく単一組合に組織した労働組合）での賃上げ共闘を行います。そして，1955年には８単産の共闘を，はじめは太田派だけでやろうとしたのですが，偏っているのではないかという批判が内外共にありましたから，全国金属（全国金属労働組合）とか，化学同盟とか，高野派と言われている組合も含め，８単産による共闘が55年の春闘として発足をしていくわけです。このころ，総評会館は三田の同盟の会館から芝公園，港区役所の隣のところへ引っ越していくことになります。ほんのわずかのお金で建っています。これも不思議ですね。

ともかく春闘が始まりました。４冊ぐらいになっていると思いますが，『総評40年史』の中に春闘について千葉さんの評価が載っています。「いやー，あれは太田がやらなくたって，どうせ誰かがやったに違いないよ」（笑）。それが千葉さんの評価です。もちろん，そういうことも言えるでしょうが，太田さんがきっかけをつくったという意味では，それなりに春闘の創始者であったと言って差し支えないでしょう。そして，1955年に入ると保守合同，左右社会党の統一もあり，「コミンフォルム批判」で内紛状態だった共産党も五全協か六全協かで統一を回復しました。

また，この大会でも高野―岩井で決戦をやります。この票数はほんのわずかな差です。岩井128。高野123。ですから，これは規約に基づくといずれも過半数に達せず，再投票が必要だということで選挙管理委員会が再投票と言おうとしたら，全国金属の代議員，椿繁夫さんという参議院議員が全国金属を代表して「高野を降ろします」と言いましたので，再投票することなしに岩井章さんが選出されます。そして，太田さんが副議長になり，太田―岩井ラインが1966年まで11年間続くことになります。

55年は社会党，共産党が統一を回復したというだけではなく，日本生産性本部が発足した年です。これはやはり総評にとって悩みのタネでした。そこで当時，東大の教授で総評の顧問格であった相原茂先生にお願いして，「生産性向上そのものには賛成である。しかし生産性向上運動は労働強化になるから反対」という総評の方針をまとめ，総評は生産性向上運動反対で一貫しました。これがやはり組織としてどうだったのか。そういう点はあると思います。

1956年には中連（中立労働組合連絡会議）が発足します。電機労連，食品，動労，全造船といった，総評に入りたいのだけれども組織の内部事情があってなかなか入れないという，いわば親総評の，総評に近い組織として中連が発足し，総評とともに春闘共闘を形づくることになります。このころの国際的な大きな動きとし

ては，スターリン批判，ポーランド，ハンガリーの暴動などがあります。しかし，私たちは，スターリン批判には少し驚いたけれども，ポーランドやハンガリーの暴動は社会主義の生成過程の一コマにすぎないだろうというくらいで，後の1989年末の，社会主義国の民主化につながるはしりだったなどとはとうてい思えませんでした。

57年には国労新潟闘争がありました。これは処分に反対する闘争です。処分反対というのは国労全地本（地域本部）が闘ったのですが，新潟地本は革同が強い，として狙い撃ちしました。国労の中には民同（国鉄民主化同盟）と革同（国鉄労働組合革新同志会）という，いわば左右両方の組織がありました。革同は共産党に近く，後で革同イコール共産党，と，革同と共産党が一緒になります。そして，３分の１ぐらいの勢力を持っていました。これが新潟に強いということで国鉄当局が新潟に処分を集中するわけです。ですから，新潟地本はものすごく抵抗しました。しかし，同時に農民の反対などもあり，この新潟闘争はうまくいきませんでした。

太田さん，高野さんの時代

そのときに太田さんが「総退却論」をぶつのです。太田さんはそれまで春闘で景気のいいスローガンを掲げて，２．１スト以来だとか，大げさなことを言うというので有名な指導者でしたが，このときには「総退却論」をぶった。「三十六計，逃ぐるにしかず」というわけですから，「太田さんが退却しろなんていうことがあるのかね」と世の中は驚きましたが，結局，総評も国労もこれに従います。退却するだけではなく，当時，公労法（公共企業体等労働関係法）という法律があり，組織が規制されていたのですが，この公労法の中に国鉄の職員か郵政の職員でなければ役員になってはいけないという規定がありました。これは明らかに一種の不当労働行為です。代表を選出するのは労働組合固有の権利であり，法律や協約で決められるようなことではありません。しかし，国労は藤林敬三公労委（公共企業体等労働委員会）会長による斡旋案をのみ，クビになった役員を交代させていくことになります。このころは，神武景気だ，岩戸景気だという形で景気がずっと長続きしただけではなく，三種の神器と言われるように，国民生活も次第に改善されていくことになります。

1958年の総評大会で太田さんがそれまでの副議長から議長になり，名実共に太田―岩井ラインが形成されます。このときの大会で高野さんが総評方針を批判されて，「あなた方は資本主義永久繁栄論である。資本主義が永久に繁栄していくと思っているのかね」と演説されたのにも驚きました。「高野さん，なかなか立派なことをおっしゃるな」と思いました。高野さんはいっとき総評の組織局長をやった後，全国金属に戻って副委員長をされていました。

高野さんはいろいろな行動をされます。高野さんはなぜこれほど変わっていくのか。総評をつくったときとはだいぶ変わりました。というのは，1953年にビルマのラングーンでアジア社会党会議がありました。ここには当時の鈴木茂三郎社会党委員長と高野さんが出席されたのですが，「ビルマには白旗共産党，赤旗共産党という二つの共産党がある。この二つの共産党が高野さんと接触し，中国共産党との関係をつけた」という説をなす人もあります。そして，56年には日本共産党に入党される。ずっと中国派で一貫していましたから，1968年，まだ文化大革命の余燼が残っている中で共産党から除名されています。そういううわさは私も聞いていたのですが，高野さんのそういう行動については『総評40年史』の152ページに，「共産

党入党，そして68年除名」とはっきり書いてあります。総評の正史に書いてありますから，まず間違いないところだと思います。

いずれにしても総評大会で高野さんがどんなに演説をぶとうが，ここでは「賃金綱領」に続いて「組織綱領」というものが大きな問題になります。「組織綱領」はいろいろな人がかかわりました。法政大学にも舟橋尚道（1925～1998年）先生がおられたし，東大助手の藤田若雄（1912～1977年）先生がおられた。当時，万年助手じゃないかといわれていましたが，とうとう国際基督教大学で教授になりました。

この藤田さんの労働組合論が，立派と言えば立派なのです。すさまじいものです。「労働組合とは誓約者の集団である。誓約した人間だけが入るのが労働組合なのだ」。こういう論で「組織綱領」の原案ができていきますから，その当時の太田一岩井でなくてもとても受け入れ難い，大変難しいものでした。「スト指令権も交渉権も妥結権も職場に委譲する」。これを職場三権と言っていますが，「職場のほうが三権を握っている。これが労働組合らしい労働組合なのだ」。こういう「組織綱領」ですから，その当時の組合幹部は受け入れかねました。「それじゃ，組合の本部は一体何をしたらいいのかね」ということでした。

確かに，力のあるところは，三池に限らずそのくらいのことができる職場もあったでしょう。しかし，大部分の職場は職制が支配していますから，職場三権などというものを与えられても，全く無意味とまではいいませんが，力にはならない。やはり，組合の本部が集約して，弱点をお互いに補い合って初めて前進できるのが労働組合だというのが，普通の組合幹部の意識でありました。太田さんも岩井さんもそういうことでしたから，この藤田理論を受け入れることはありませんで，「組織綱領」は草案のまま棚上げになりました。そして間もなく，警察官職務執行法改悪とか，勤務評定反対闘争とか，そういうものを経て60年安保に入っていくわけです。

朝日新聞，60年安保のこと

塚田　60年安保・三池闘争の前にどうしても申し上げたい。一つは，このときに総評は主として国労の内部に動揺があったということで，「日本的労働組合主義」なるものを発表します。この評価はいろいろあろうと思います。同時に，そのときに社会党大会があったのですが，社会党大会で太田さんが西尾末広氏除名の先頭に立つのです。これと一体労働組合主義とどういう関係になるのか。後でも触れたいとは思いますが，総評の幹部は，政治，政党に発言するのを何かクセとしています（笑）。労働組合主義とこの西尾批判とをどのように理解したらいいのか，私は理解に苦しむところです。

同時に，このときに重大なのは朝日新聞の態度でありました。朝日新聞に笠信太郎という著名な評論家がおられました。この方は西尾支持です。当時の朝日新聞をご覧になっていただければ分かりますが，西尾支持でずっと一貫しています。今の朝日新聞から全く想像もつかないような，変なところに肩入れしているなという感じがしました。今の朝日は安倍内閣批判，それなりにまともな記事が多いと思いますが，当時はそういうことを経て民社党が結成されます。ですから，説をなす人は，太田さんが民社党をつくったのだと言う人もいるくらいです。

それはともかくとして，次第に安保闘争に入っていきます。安保闘争では，ご承知のように多くの文化人が反対します。例えば阿部知二，石川達三，清水幾太郎。清水幾太郎という人も本当に理解に苦しむ人物で，後で核武装論をぶつまでに至っています。ともかく，「若い日本

の会」なんていうのもでき，開高健，大江健三郎，何と浅利慶太，石原慎太郎まで安保批判をやっています。これは立派と言わざるを得ませんが，このときに総評は，三池の問題を中心にしながらも，後の構造改革にも関連するような長期政策委員会をスタートさせます。これがまた相原茂先生，堀江正規先生，井汲卓一先生，各派を代表する多くの学者をよんでいます。社会主義協会の向坂派だけは入っていなかったそうですが，これが総評の，炭労の政策転換闘争，あるいはまた総評の構造改革戦略に取り組む理論的な支柱ということになります。

安保闘争はご承知のような盛り上がりを見せて収拾しますが，三池も同時に終わりました。そして戦後，日本の労働組合は多くの分裂を経験しましたが，どんな争議でもいったん分裂が始まると，争議の最中でなくても分裂があったことがあります。いずれも第二組合が多数派になっていく。総評が守っている第一組合は少数派にならざるを得ないという，いわば運命的なものがあるようにも思えるわけです。

「４．８声明」

1964年の春闘は，有名な池田（池田勇人首相）・太田会談で，官公労の賃金について民間並みを確認した。これは評価していいと思いますが，総評の全電通だけはこれに「うん」と言いませんでした。妥結の手続きがちゃんととられていないということで，池田・太田会談を評価しませんでした。このときに共産党は「４．８声明」を出し，「４月17日ストは挑発だから，ストライキは中止せよ」と訴えるのですが，このときにも全電通などはすごいです。国労はそんなことをやりませんでしたが，全逓も一部やりましたかね，共産党が強い支部，分会，地方本部に乗り込んでいき，「支部解散，分会解散。地本解散，再登録。本部が指名する役員の下に集まりなさい」。こういう再登録ということをやります。これをやられましたから，全電通内の共産党の勢力は本当に弱くならざるを得ませんでした。

「４．８声明」はそれ自身，前衛政党としてはあるまじきものだったと私も思っていますが，このときにもまた不思議なことが起きるのです。高野さんは当時，共産党員だったということがあるのかもしれませんが，高野さんと私鉄総連副委員長だった内山光雄さんの二人が総評の幹部として「４．８声明支持」を「赤旗」に載せます。これもみんな驚きました。高野さんは「そんなことを言いそうな人だね」というのはあったけれど，内山さんまでが言う。内山さんという方は労農党でした。私は内山光雄さんの自伝を手伝ったことがあり，このときの経緯を詳しく聞くことはできました。「共産党に同調するのはいかん」ということで，内山さんは私鉄総連から禁足処分を受けています。

よく聞くと，必ずしも間違ったことをおっしゃっているわけではなかったと思います。というのは，「政党はどのような団体であれ，団体の行動について一定の見解を持つ自由がある。政党の権利である。発言してよろしい。それが間違っているなら取り入れなければいい。正しいと思ったら取り入れればいい。それだけのことで，その政党の党員が意見を発表したからといって労組が処分をするなどというのは大間違いである」というのが内山光雄さんのご意見でした。私はそれを聞いて，本当に内山さんはいいことをおっしゃるなと感心をしたところです。

構造改革論と労働戦線統一

60年安保が終わり，炭労の三池も敗北になり，このときに炭労の政策転換闘争が行われます。それと絡んで，社会党の「構造改革論」問

題が出てきます。これはなかなか難しい問題で，総評が反対したからということだけではなしに向坂派と言われた協会派が反対したこともあり，社会党大会では最終的に，構造改革路線は戦略コースにはのせられないという大会決定になります。それを唱えていた江田三郎（1907～1977年）さんが離党して社民連をつくり，そして間もなくお亡くなりになる。そのようなことで「構造改革論」は社会党内からも消えていくわけです。しかし，そのときに，炭労をはじめとして全逓の宝樹文彦さんとか，日教組・自治労などもそうだったと思いますが，総評の委員長クラスは「構造改革論」賛成の人が多かったのです。ですから，太田さんは総評の中では少数派になっていかざるを得ないということで，1966年に総評議長を辞任されます。ちょうど合化のナンバー２である東洋高圧労組の分裂があり，第二組合が多数になったというようなこともありましたが，ともかくこれで太田さんの総評議長という時代は終わったわけです。

そして，宝樹さんが労働戦線統一ということを打ち出されますが，最初の打ち出しは「労働戦線統一，社会党政権の樹立のために」という文章でした。雑誌『月刊労働問題』だったと思います。ここに書かれた「社会党政権樹立のために」というのは，社会と民社が一緒にならなければだめだ，そうしないと政権はとれないという意味かもしれませんが，それを労働戦線統一と結び付けるのはいかがなものかとも思います。ともかく，ここで太田さんと宝樹さんとの意見も，そして岩井さんとの意見も離れていくことになります。

後の「社会主義協会の分裂」というところに書いておきましたが，私は社会主義協会に入ったこともないし，社会主義協会がなぜ分裂したのか，経過は知りません。太田さんは合化労連の中では，社会主義協会というようなことを振り回すことはあまりありませんでした。学生運動などがあり，社会党青年局を中心につくった「反戦青年委員会」という青年の行動組織が，学生と一緒にやるような動きがあったものですから，総評は反戦青年委員会を凍結します。後に社会党も，学生運動のあまりの激しさについてはいけないということで絶縁することになります。

1970年のことですが，宝樹さんが「労働戦線論」をぶったときに，総評は８月の大会で岩井さんが提起して，４項目の労働戦線統一の方針を決めています。１番目が「すべての労働組合の大結集である」。２番目が「資本への戦闘性」。３番目が，表現としてどうかと思いますが，「政党との関係は固執しない」。そして４番目には，「統一ができたら総評，同盟は解消する」。しかし，誰が考えてもここには社会党・総評ブロックというものがあり，同盟・民社党ブロックというものがある。この二つが一緒になろうというならば，政党問題を入れたら一緒になれるはずもない。それを誰もが分かっているから，総評の大会でもそういうことを決めたわけです。

しかし，それを見ていた合化労連は「政党支持自由」という路線を打ち出すことになります。そういう方針を決められて総評は，15大要求とかいろいろありましたが，太田さんが辞めた後も，「ミスター総評」と言われるぐらい岩井さんのワンマン主導でありました。しかし，この年に岩井さんがお辞めになり，市川（市川誠，1912～1999年）―大木というラインになります。

その翌年，合化は，「１．要求での統一」「２．資本からの独立」「３．政党からの独立」「４．全的統一を目指して民間先行」という，「統一４原則」を打ち出します。「全的統一」は皆さん方お分かりだと思いますが，二通りの意味を含んでいます。一つは，官公労も民間も問わ

ないで統一すること。もう一つは，共産党系の組織だからといって差別をしないこと。この４原則方針を合化労連は1971年に決めますが，総評主要単産の中で政党支持を自由にしたのは合化労連だけでした。先ほど言ったように，1970年の大会で総評は「政党との関係は固執せず」などということを言いながらも，政党は社会党支持でずっと過ごすことになります。

スト権ストのこと

さて，そういう経過を経て，1975年を迎えます。75年こそが労働運動の低下がはっきり見えます。そのころ，総評大会のたびに，合化労連修正案を提起しましたが，全く無視され，否決の連続でした。反マル生闘争[(2)]がきっかけだという方もいます。そういう面もあるにはあるのですが，75年は本当に画期でした。前年，日経連が「ガイドライン」を打ち出します。つまり，賃上げを３カ年で15%，10%，10%と次第に抑えていくのが日経連の方針でしたが，75年の春闘は15%にも行かなかった。相手が15%でいいと言っているのにこちらが13%で終わっている。これは鉄鋼大手５社の一発回答，14.9%が大きく響いたわけです。

同年に年末のスト権スト[(3)]。11月26日から８日間，ストライキを打ちました。後に連合の会長になる山岸章（1929年～）という方がいて，全電通の委員長，情報労連の委員長でしたが，最近も『朝日新聞』に感想を書かれています（2013年11月18日付）。そこではスト権ストのことはあまり書かれていませんが，当時，公労協（公共企業体等労働組合協議会）の中心は国鉄，全電通，全逓で，あとは専売とか幾つかある。この公労協の組合は面白い運営で，書記長が代表委員です。国労で言えば冨塚書記長，全電通で言えば山岸書記長，全逓で言えば保坂書記長。この３人が代表ですべてを取り仕切る。委員長は大臣であるという位置付けです。大臣は何もしない。それが公労協のスタイルらしいのです。

山岸氏に言わせると，「国労はストライキをやりたくて，やりたくて仕方がない。そんなにストライキをやりたいなら，血ヘド吐くまでやらせてやろう」（笑）。これが一体，労働組合幹部の言い方だろうかと思うくらい，国労の悪口を言っています。そして，ストライキに入った。失敗しましたね。これは史上最長のストライキでしたが，次の年の１月には「202損賠」，202億の損害賠償を国鉄から請求されて，組織がガタガタになってしまいます。

1975年のスト権ストは一体何だったのか（本誌678，679号の「証言：戦後社会党・総評史」参照）。『総評40年史』も読んでみました。ほとんど書いていないですね。事実の経過が書いてあるだけです。最近，富塚三夫さんが編集された『総評40年』というDVDも見ました。しかし，ここでも，当時は三木内閣ですが，「三木なら揺さぶれば取れるだろう」という甘い判断だったということですが，理解しにくい弁解になっているように思います。全体の組織率もこの年から低下の一途をたどり，この75年の闘争が以後長期にわたる総評の低落につながっていきます。

総評解散へ

そして，総評は，日教組出身の槙枝元文（1921～2010年）―富塚コンビになり，79年の東京

(2)　1969年から71年にかけて，日本国有鉄道（国鉄，現JR）当局が推進した生産性向上運動をめぐる労使紛争をいう。マル生は，国鉄当局がその指示文書に㊟と印したことに由来する。

(3)　1975年，総評傘下の国労，全逓，全電通などが８日間にわたる全面的なストライキ（スト権スト）で争議権の回復を政府に迫った。だが懸案は解決せず，その後も総評と政府の間の重大な争点として残された。

都知事選挙がありました。太田さんが立候補して，190万対154万で鈴木俊一（1910～2010年）候補に敗れます。大阪府知事選でも負けています。私は，現職の組合幹部が議員とか知事に出るのはどうもうまくない。組合幹部は組合幹部として一貫したほうがいいと思っていましたから，あまり賛成ではなかった。それにもう一つ，太田さんは美濃部時代の思い出からでしょうが，「社公共がそろわなければ自民党に勝てるわけがないよ」と，かねがねおっしゃっていました。ところが，公明党はついてきそうもない。社共だけだった。ですから，これも理解に苦しむところでした。ともかく太田さんは，以前には労働戦線統一に賛成をしたこともあるのですが，東京都知事選挙で共産党が本当に親身になってやってくれたことを体で感じてしまったのでしょう。社会党の中はいろいろでしたからね。総評は富塚さん以下，かなり本気でやってくれましたが，こういう結果になったということで，それ以後，太田さんは共産党の考え方を支持するようになっていきます。

間もなく槙枝―富塚さんコンビは連合への路線を敷きます。レールを敷いたのは槙枝―富塚さんというラインです。ついで，私鉄総連の黒川武―自治労の真柄栄吉という民官コンビになっていくわけです。黒川さんは私鉄総連の委員長でしたが，『総評40年史』の巻頭言を書かれています。それをメモに抜粋しておきましたが，「私どもが一生懸命に闘ってきた平和運動はどうなってしまったのか。護憲闘争はどこへ行ってしまったのか。限りなく右へ寄っていくのが現実路線だ。このようになってしまっているじゃないか」と黒川さんはおっしゃっています。真柄さんは別のことをおっしゃっていますが，……。私の言い方だと，総評の墓掘り人は黒川，真柄の二人であったと思いますが，黒川さんはそのようにおっしゃっているわけです。

その後いろいろな経過があり，1989年に総評は解散して，連合と全労連（全国労働組合総連合），全労協（全国労働組合連絡協議会）がスタートすることになります。発表時は，連合800万，全労連140万，全労協30万ということになっていますが，最近ではだいぶ減っていますよね。それぞれ数十万減っていると思います。全労協という組織もよく持っている。まあ，国労が頑張っている。都労連が支えているのかもしれませんが，よくやっていると思います。太田，市川，岩井という３人の顧問が連合への参加に反対していろいろ運動をやってきましたが，結果的にこういうことになり，太田さんも1992年には労研センターを辞任しています。そして，1998年９月24日，86歳で亡くなっています。岩井氏も市川さんもお亡くなりになりました。３顧問はいずれもお亡くなりになっているわけです。

あとは高野さんが占領軍を利用して，産別会議でも総同盟でもない総評というものをつくりました。それと同じことを考えたのが千葉さんで，やはり「総評でも同盟でもない連合」というものを考えた。高野先輩のまねをして連合を結成したわけです。突き詰めて言うと総評は，同盟もそうですが，結局は「米ソ冷戦」の時代でした。1946，47年から1989年に社会主義国が民主化される段階までを普通，米ソ冷戦の時代と言っていますが，冷戦などというのは甘い言い方ではないか。アジアに関する限り，朝鮮でもベトナムでも火を噴いたわけですから，「米ソ対立」と言うべきだと思っていますが，ともかく世の中的には米ソ冷戦の時代だった。その時代の産物が総評だったということが言えると思います。

「太田氏の労働組合主義」については，総評幹部としてはいささか政党政治に介入しすぎたという感じを，私は傍にいて持っています。こ

の悪いクセは高野さんからの時代です。重光首班論にしても何にしても高野さんだった。これは槙枝―富塚という時代にも起きます。当時，社会党は，政権参加が可能かも分からんというくらいの力を持っていたと思いますが，社会党内部が協会と反協会で，向坂協会が社会党を引っかき回していた。そうすると総評が乗り出し，社会主義協会いじめを始める（笑）。総評からいじめられたものですから，とうとう社会主義協会はすっかりおとなしくなり，理論集団ということにならざるを得ませんでしたよね。どうも総評の悪いクセではないかと思います。

「太田氏のひととなり」も，もう皆さんご存じのようなことが多いのですが，東大の相原茂先生，同じく東大教授の中村隆英先生，法政大学の高木督夫先生といった先生方のほかに，ジャーナリストとしては朝日新聞の中野さんや東京新聞の大塚さんという方々とは非常に親しかった。

あとは皆さまのご質問があれば，私の知っている範囲でお答えをしたいと思います。よろしくお願いします。

質疑応答

太田薫さんの都知事立候補について

――せっかく立派なメモをつくっていただきましたのに，時間がなくて端折って報告をしていただくことになりました。大変申し訳ありません。では，どなたからでも自由に質問を出していただきたいと思います。

――太田氏の東京都知事選立候補の問題について質問したいのですが，1979年に立候補をする前に，1967年の都知事選のときも太田氏を候補にしようという動きがあり，太田氏も一時，都知事選の準備をした。やはり，そのときも公明党の支持が必要であるということだった。ただ，そのときは公明党の支持が得られそうもないということで辞退し，美濃部氏が代わって都知事選候補になるという流れがありました。そのときは公明党の支持が得られないということで辞退したにもかかわらず，79年もやはり公明党の支持が必要だと言っていて，結局，支持が得られなかった。にもかかわらず都知事選に立候補したのはなぜでしょうか。

塚田　そこが，私も理解に苦しんでいます。本当に直前までそうおっしゃっていましたからね。そう言うと失礼だけれども，富塚三夫氏が本気になって推してくれたからじゃないかと思います。私は書記長失格ですが，ある本によると，太田氏が決断をする前に富塚氏が合化労連本部を訪ねて，太田氏に立候補を要請した。それがきっかけだった。私は当時，そんな話を聞いたことがなかったものですから，本当に驚きました。これは当時の労働協会の，『**週刊労働ニュース**』のすっぱ抜きというか。合化労連中央執行委員会は今まで採決をやったことがありません。このとき１回だけ，太田氏の東京都知事選について採決をしました。圧倒的多数は賛成でしたが，反対が１か２，保留が２ぐらいありました。私は保留でした。これは別に公表したわけでもないのに，すぐ『週刊労働ニュース』に載ったからびっくりしました。

いずれにしても，太田さんがふだんおっしゃっていることとどうも違う行動をされているなと思った。これはどう考えても，富塚氏はかなり本気で応援してくださった。槙枝議長はそれほどではなかったですね。私は日教組本部がある日本教育会館（東京・一ツ橋）へ行き，

何遍も「よろしくお願いします」と言ったのですが，「うーん，どうも社会党がね」というのが槙枝さんのあれで。だから，社会党は誰か別の人を出したかったのでしょうね。名前を言うと差し障りがありますが（笑）。

当時の公務員制度などについて

――塚田さんの略歴のところですが，帰国された後に最初は長野県県庁ですね。その後，人事院，労働省というと，今の公務員制度だと国家公務員で，地方公務員の試験と国家公務員の試験とは違うと思うのですが，その当時はどういう試験だったのでしょうか。

塚田　長野県庁は無試験で通りました（笑）。顔パスです。私の父が小学校の校長をやっていたものだから，それで顔を利かしたのでしょうね。人事院は違います。当時，人事院はまだできていませんで，総理府に臨時人事委員会というものが設置され，人事院の準備機関になっていて，総理府人事委員会の採用試験がありました。試験に合格をして人事院に採用された。労働省もそうです。労働基準監督官試験を受けました。

――労働運動などに関心を持たれたのはお父さんの影響ですか。

塚田　いやー。

――そうじゃない（笑）。

塚田　人事院ですね。

――人事院に入ってから。それまでは，あまり労働組合や労働運動には……。

塚田　ええ。長野県庁で２．１ストライキを経験したといっても，労働運動にはそれほど興味もありませんでした。

人事院は当時まだできたばかりで500人ぐらい。後では1000人ぐらいになりますが，日本の官庁の中で一番小さい官庁でした。そこで突然ですが，給料を１段階間違えて15号俸が16号俸になり，全員が１号ずつ賃下げさせられた。それでみんな怒ってね。

――人減らしだ。

塚田　ええ。それで人事院職員組合をでっち上げたのです。500人ぐらい。そのときに初めて労働運動というものを知りました。結果的にはその賃下げ阻止はできませんでした。人事院はご承知のように公務員を取り締まるところですから，こんなところで労働組合をつくっていいのかと思いましたが，つくったら案外あっさりと承認をして，組合事務所もちゃんと地下に貸し付けてくれた。東京大学の学生で川本和孝さん（後に時事通信社専務）がアルバイトで来て，組合の専従をやってくれました。当時，人事院職員組合はどんどん人間が増える一方で，小さい官庁ですが1000人になりました。

――千葉利雄さんとは人事院に勤務をしているときに一緒だった。

塚田　そうです。

――千葉利雄さんも一緒に組合運動をされたのですか。

塚田　ええ，やりました。そして，間もなく総同盟へ行ってしまいます。

――そうですね。総同盟へ行く。その千葉さんが太田さんに塚田さんを紹介した。こういう関係ですね。

塚田　いえ。冒頭申し上げましたが，「宝樹全逓へ行くか，太田合化労連へ行くか，どっちかだ。鉄鋼労連でもいいのだけれど，鉄鋼労連は俺が行くからね」って千葉さんに言われてしまった（笑）。

――もう予定していたのですね。当時，労働組合に書記があるということは，普通の民間に就職するのと同じような気分ですか。

塚田　労働組合の書記の採用ですか。

――ええ。応募する方々は，就職するのと同じような気分で来たのですか。

塚田　一人ひとり聞いたわけではないけれども，労働組合の書記は当時，圧倒的に早稲田の人が多かったのです。早稲田の学生運動の延長のような気持ちで書記になった人が多かったような気がします。

――それはどこの組合の書記もですか。

塚田　労働組合の書記一般。

――まさに当時はそうでしたね。

塚田　東大とか慶應の人もいましたが，これは少数でしたよね。千葉さんは本当にエリート中のエリート。不破さんと一緒でね。

――不破さんが鉄鋼労連に入るのは1953年で，先ほど名前が出てきた経済学者の井汲卓一さん（1901 ～ 1995年），あの人の紹介で入ってきます。

塚田　井汲さんの。そうですか。

――千葉さんがやはり推薦するわけです。私も実は鉄鋼労連に千葉さんによって採用され，彼とは1954年から22年間，一緒に仕事をしたのですが，書記採用の実質的な人事権は彼が持っていました。

塚田　すごいねえ。

――私も法律担当で採用されて以来，ずっと勤務した。それから以後も書記採用という点では，特に学卒の，かなり有能な人間を採用しました。

――このころ，書記の口はかなりあったのですか。

塚田　ええ，あることはありましたね。

――組合がぼんぼんできていますからね。

――そうです。1950年代以降，組合が機能をかなり広げてきて，単産もできてきます。学生運動の活動家はなかなか就職できないんですよ（笑）。

――ちょうどいいところだ。

――労働組合としては，やはり学生運動経験者は比較的使える。

塚田　そうですね。

――それなりの能力があるということで，だいたい1953 ～ 55年頃，ずっとみんな組合に入っていった。

塚田　そうですね。たくさん入ってきます。

――そして，大学に労働組合書記の会議などをつくり，いろいろまた相互に支援し合う。こんな体制ができていました。

――長野県の松本中学校を卒業されたのと長野県庁の学務課勤務という，この２つの点です。私の研究で間違えていたら申し訳ないのですが，長野県庁というと，当時の知事が林虎雄（1902 ～ 1987年，1947 ～ 1959年に知事）という人で。

塚田　そうです。革新の知事でした。

――社会党の河上派の参議院議員になる人ですよね。

塚田　そうです。

――その林虎雄という人と塚田さんは結構接触されていたのかどうか。それから，松本中学というと棚橋小虎（1889 ～ 1973年）という人がいて，この人は日労（日本労農党）で，のちに民社党に行きますが，そういう人との関わりもあったのか。これがまず，長野の件では１点です。

もう一つは，同じく林さんと同様，社会党の河上派のことになります。1959年から60年のいわゆる民社分裂のときに，西尾が民社をつくる際に社会党の東京都連は比較的旧日労系の人たち，言えば河上派が強く，河上派を民社に行かせることは総評にとって非常に危険である。

塚田　そうそう。

――そのために太田薫は，要するに河上派だけは離党させたくないということで奔走した。結局は武藤武雄さんとか何人かが離党します。あの辺は西尾だと思いますが，なるべく止めるということで運動をされた。そのときのことに

ついて触れていただきたいと思います。お願いできますでしょうか。

塚田　最初の長野県のことは，私は長野県庁には本当に少しいただけで，林知事なんていうともう雲の上の方ですから（笑），我々末端とは何の関係もないです。

それから，松本中学というのは，何しろ戦争中ですから，軍事教練と勤労奉仕のみ。英語なんていうのはほとんど勉強もしていません。今では松本深志というと進学校になってきているようですけれどもね。

社会党の分裂，当時の労働運動について

塚田　河上派の話は私も直接は知りませんが，確かに西尾派が……。名前は違ってきましたが，先ほど言いました「朝日」の後援なども受けながら，だんだんに民社党に収斂していきます。そうすると河上派の動向は，社会党にとっても総評にとっても非常に重要なテーマでした。ですから，太田さんも岩井さんも議員会館へ行き，一生懸命になって河上派の個別訪問をやっています。「選挙のときには応援しますからね」って票とお金をちらつかせて（笑）。現金を配ったという話は聞いていませんが，とにかく河上派の引き止めに……。一部は西尾新党へ行った方もいらっしゃいますが，主力は残ってくれたと思います。その点では総評にもかなり危機感があったのではないでしょうか。

――塚田さんはその状況をじかに見ていらっしゃいましたか。要するに，民社分裂のときの太田薫とか岩井章とか，その周りのほうで，いわゆる河上派の人たちの動向を一部始終見ていたとか，そういうことは覚えていらっしゃいますか。

塚田　そういう話は外から聞こえてくるだけで，太田さんが合化労連の書記局で何かそういう話をすることはありませんでした。太田さんが外での活動を合化の本部でみんなにしゃべることはあまりありませんでした。むしろ，高野さんなどがやってきた。これは高野，太田がけんかする前の話ですが，当時はダルマストーブでしたから，高野さんという方はストーブの回りにみんなを集めてはいろいろ話をされる。

高橋亀吉（1891 ～ 1977年）という経済評論家がいます。高橋氏は戦前からまあまあ名を成していたのでしょうが，戦後もまだあのころは非常に活躍をされていました。「高橋亀吉に話を聞いて日本経済の勉強をしたんだよ」。本当かなと思った（笑）。だって，あれだけ共産党は労農派と議論したのだから，経済学者がいないわけがない。なぜ高野さん，あんなことをおっしゃるのかと不思議に思いました。

――その高野さんと太田さんはなぜけんかしたのですか。つまり，両方とも左派ですよね。ところが，分かれて総評の事務局長に座らそうという形でやる。選挙では両方で対立候補を出す。どこが違ったのですかね。大きな違いは何だったのでしょう。

塚田　私は当時，合化労連書記局に入ったばかりで，高野さんについて，太田さんは「労働運動の神様だ」と言われて評価をしていたのに，途端にけんかが始まってしまったでしょう。一体，何でけんかしているのか，私ども末輩の書記には全然見当もつきませんでした。後でいろいろな文章を読んでみると，太田さんに言わせれば，高野さんの政治偏向である。このように決めつけているのですが，政治偏向と言われるほどの偏向があったかどうかは別にして……。

――太田さんもそれなりに政治偏向をしていたのではないですか（笑）。

塚田　人のことを批判する資格がないくらい，労働組合主義を逸脱しているのではないかと思います。だから私は，辞める前ですが，太田さんに自由にものが言えるようになり，「太

田さんね，労働組合主義から外れた行動が多かったですよね」と言ったら，太田さんもそれは認めていました（笑）。

高野さんは，日産自動車とか，幾つか争議の失敗もありましたね。

――尼鋼とか，日鋼とか。

塚田　そう。尼鋼とか日鋼とか，これがみな高野主導でしたから。

――高野さんの，いわゆる「ぐるみ闘争」というものですね。家族ぐるみ。地域ぐるみ。それに対し，今度は平和経済と再建運動という政治路線を結合させて，国民総抵抗路線を推進した。それが高野さんです。

――だから，組合運動ではないという批判があったんですよね。

――太田さんはやはり経済主義。

塚田　そうそう。

――つまり，労働組合の基本的な任務は賃金引き上げ闘争だ。この引き上げ闘争を成功させることが何よりも労働組合の基本的任務でなければいけない。

塚田　そう言っていました。

――そういうところから産業別統一闘争としての春闘を主導していく。その総評の運動路線をめぐる対立が1954年か55年か，あの辺りになる。

塚田　そうです。

――それで役員選挙にまで発展したということですね。

――春闘のようなアイデアは何かきっかけがあったのですか。バラバラにやっていた賃金闘争を一つの時期にまとめて，しかもそれを春にやる。単産が足並みをそろえて一斉にやろうじゃないかというのは……。

塚田　なぜ春なのかということで言うと，当時，合化労連の化学産業は化学肥料が主な生産物でした。化学肥料は春に必要なわけです（笑）。ですから，その時期に止めれば効果が非常に大きい。こういう発想があったと思います。

――種まきの時期。そうでしたか。要するに，自分の影響力の下にある太田派と言われるような産別を集める。

塚田　そうです。

――それで５単産。それだけではちょっとという批判も中にあったのですか。

塚田　ありました，中からも外からも。

――では，高野派も入れてやろうじゃないかというので８単産に増やした。こういう経緯ですか。

塚田　ええ，全国金属とか化学同盟とか。これは両方とも高野派と言われた組合です。

――先ほどのことと関わって。塚田さんを太田さんに紹介したのが千葉利雄さんだったというのは私も初めて知りましたが，私も長年彼と一緒に仕事をする中で，千葉さんの塚田さんに対する信頼感は非常に強かったですね。なぜかというと，合化労連と鉄鋼労連は硫労連会館の中で，一緒で。

塚田　まあ，兄弟のような。

――兄弟のように生活していた。そういうこともあり，とりわけ親しみを覚え，また塚田さんの人柄から，恐らく信頼感を寄せていたと思うのですが，実は千葉さんは転向します。つまり，左派の指導者として労働組合の執行部，あるいは三役などに対する指導的影響力も非常に強かった人です。先ほど話がありましたように，1957年だとか59年だとかに鉄鋼が長期闘争をやります。

塚田　11波のストライキ。

――1932年の11波，19日間。それから，59年の49日間のストライキ闘争。前者はゼロ回答で，後者は800円の一発回答で共に敗北し，そこから宮田義二氏（1924～2012年）が，八幡製鉄書記長のポストから鉄鋼労連書記長を

目指して出てくるわけです。ところが，やはり左派の抵抗の中で書記長に就くことができずに１年間，書記次長にとどまり，1960年，この書記長に昇格します。それから右派の鉄鋼労連支配の工作がずっと進んでいく。

塚田　そうです。

――その工作が成功するのに６年ぐらいかかっています。いわゆる日本的労働組合主義ではなく，新しい労働組合主義の理念を掲げるわけですね。それによって大企業の役員選挙を独占していきます。そういう実力を背景にして，1966年に鉄鋼労連が IMF-JC（International Metalworkers' Federation-Japanese Committee, 国際金属労連日本協議会）に加盟。その体制が２～３年のうちに完全に支配されたときに，1968年とかに実は鉄鋼労連の基本路線の大転換が始まるわけです。そのはじめの1957年，1959年の闘争，千葉さんが非常に大きな主導的役割を果たしたものがゼロ回答に終わり，彼自身がものすごく精神的に参ってしまい，出てきたり出てこなかったり，鉄鋼労連の勤務もおろそかになるわけです。その後，本人がいろいろなところでしゃべっているところによると，自殺まで考えた。「完全に左派の時代は終わった。我々の主導権はもう失われた。自分は退職も覚悟した」とか，いろいろなことを書いています。

そして，そこに目をつけた宮田義二氏が彼を説得するわけです。

塚田　そうですね…。

――そこが大事なんです。説得をして宮田氏は彼に対し，「あなたの思想は問わない。とにかく鉄鋼労連というものを強くしたい。そのために何でもあなたの好きなようにやってほしい」。

――うまいですね。

――彼は賃金の専門家でしたから，鉄鋼労連の賃金実態調査を２年ぐらいかけてやり，彼のために調査室長というポストをつくり，それから企画調査部長だとか，いろいろなポストを与えていきます。その際に，従来左派だった立場から足を洗う。彼は共産党員でしたから，共産党も脱退する。あるいは，左派だけど私たちと一緒につくっていた月曜会という組織からも脱退をする。そして，完全に向こうの体制に入ることになります。

私がお尋ねしたいのは，1964年から彼自身の立場が変わるわけです。それから，先ほど塚田さんが言われたように鉄鋼労連の書記次長になり，副委員長から常任顧問，総評のほうの政策委員長などを歴任して，1988年に退職されることになります。1964年以降，千葉さんと塚田さんとの関係はどのようになっていったのでしょうか。つまり，太田さんに紹介をして，それなりの友好関係を保っていた。最初は左派だったと思います。左派的な立場から自ら転向し，主導を変えた路線に乗っていくのですが，その間の対外的な諸関係，また，お付き合いはどうだったのでしょうか。

塚田　さびしかったですよ。何としても私を労働運動に引き入れた人だし，大先輩ですから，彼に教わることばかりでしたよね。その人が，いつの間にやらと言うとおかしいけれども，どんどんどんどん右へ行き，とうとう民社党員になります。そこまで行ってしまうと，ちょっとついて行きにくくなる。総評に小島健司さん（1921年～）という調査部長がいました。後で日本福祉大の教授になります。

――まだ信州におられるというふうに。

塚田　そうなんですよ。軽井沢にお孫さんか子どもさんがおられるので，そこへ引っ込まれた。最近どうも年賀はがきも来なくなったので，小島さん，どうされているか分からない。

東大の相原先生は総評の顧問をしながら，「ど

うも労働組合の書記連中は勝手なことばかりやっていて，全然勉強しとらん。勉強をしなさい」ということで塾のようなものを設けます。総評の小島さんが塾頭のようなもので，マルクスの『賃金・価格および利潤』（大月書店国民文庫版）をテキストにして毎週１回，勉強会をやったのです。総評の柴田さん，紙パ（全国紙パルプ産業労働組合連合会）の庄司さんとか，安達さんとか，全造船（全日本造船機械労働組合）の白石さんとか，それはもう熱心に。

不思議だけれども，当時，法政大学の統計研究所があった。

――今も日本統計研究所は法政大学多摩キャンパス大原社会問題研究所と同じフロアにあります。

塚田　相原先生がそこの会議室をお借りして，２年まで行かなかったかな，よくその塾を……。小島さんは後で名古屋へ行ってしまいますから消えてしまいますし，事務局をやられた石川さんは確か自転車振興会の研究所へ行ってしまいましたが，千葉さんはそこに呼ばれていません。どちらかというと千葉さんという方は，あまり群れたがる人ではないです。あまりグループに参加をしないというタイプです。小島さんもあえて呼ばなかったのかもしれません。しかし，小島さんと千葉さんはやはり微妙な違いがありました，当時から。だから千葉さんは呼ばれなかったのでしょう。

それからまたずっと後になりますが，金子さんという公労委の委員がいらっしゃいました。

――美雄さんですね。

塚田　金子美雄さん（1910 ～ 1993年）は労働省の労働統計調査局長をやられた方です。そして，日本賃金研究センター所長，これは閑職でしょう。公労委の委員のほうが本職のようだった。当時，公労協の闘争は非常にすごかった。そうしたら金子先生が，千葉さんと電機労連の藁科満治さんと私，当時３人とも調査部長でしたが，３人をよんで「勉強会をやるから来い」。相原先生の勉強会が終わって，もう10年ぐらいたっていました。この研究会も１年以上続いたと思います。労働省出身で孫田良平という賃金の専門家とか，佐々木孝雄さんとか，田沢淳一郎とか，労働省の官僚が多かったけれども，そういう人たちと一緒に勉強会をずっと続けました。

鉄鋼労連の動向

塚田　後では鉄鋼労連の「隠しベア」問題があった（笑）。これがややこしい問題で，これだけでも１時間以上しゃべらなければいけない難しいテーマですが，これを発案したのがまた千葉さんなんですよね。千葉さんが「35歳標準労働者方式」を考え出しました。

企業には中途採用の人がたくさんいますから，35歳だと，18歳入社で17年勤続ならば正規労働者。しかし，これがまたおかしいと言えばおかしいのだけれど，「35歳10年勤続」とか，勤続の年数が中途採用の人しか対象にしない標準労働です。企業の中に入れば中途採用のほうが多いのかもしれませんが，「35歳標準労働者」を探し出していくと，表示としては平均賃上げより低く見えるんですよね。これは千葉さんも後でお認めになりました。2000円ぐらい違う。平均額が仮に１万円2000円ならば，標準労働者方式では１万円しか出てこない。

その鉄鋼が１万円というようなのが壁になり，春闘が管理春闘であるとか，「８社懇」なんていうのがあった。鉄鋼では新日鉄と日本鋼管とか，電機の日立とか松下とか，その８社の労務管理体制の中に組み込まれていく一つが「35歳標準労働者方式」です。この「35歳標準労働方式」をめぐっては，金子さんと千葉さんはいい関係にあるけれども，雑誌で論争をした

りしています。やはり，金子さんは「35歳標準労働者方式」はまずいという批判です。だから千葉さんは反論していました。

2009年に，千葉さんが亡くなられて葬式に行きました。宮田氏が来ていました。一言だけでした。

――一言言っただけですね。あんな弔辞があるのかと思うぐらい。

塚田　「千葉さん，ご苦労さんでした」。

――「安らかにお眠りください」。それだけでした。あとは一言も言わない。一体，これはどういう意味だって（笑）。あれだけ彼のために全力投球して，それであれはないだろうという，そういう意味で。

――その千葉さんが最後までこだわっていた問題が一つあります。それは先ほどの生産性基準原理論に関係してくるわけですが，いわゆる「経済整合性論」，1973年に日経連のあの15%が出てくる。これは労働組合サイドから鉄鋼が提案するんですね。

塚田　そうです。

――それがずっと財界の賃金決定の基準に導入されてくる。彼はそれが定着していくことに対するものすごい抵抗，危機感を持っていて，あれはあくまでも緊急避難的な，一時的なものである。

塚田　そう言いましたね。

――そういうことを言っていたのが一向に理解されずに，これが当たり前な賃金決定基準として定着していってしまう。経済情勢が好転した中では，労働組合主義の原則はあくまでもストライキをもって闘うことだ，この原理に返るべきだと説得をするのですが，ほとんどそれが，まず組織内で通らなくなるわけです。

塚田　通らないわね。

――さらにIMF-JCレベルでも通らなくなる。その後，日本労働運動全体の当たり前の賃金決定原理になっていく。それに対し，あるジャーナリストのところに行って「とにかく組織内ではだめだから，『労働ニュース』に発表する場を与えてくれ，そのために努力してくれ」と言って一生懸命努力し，1990年に入って千葉さんが書いたものがあります。これは非常によくまとまったものです。「経済整合性論の誤解を解く。もっときちっとした原則に立った賃金闘争をやらなければいけない」。それを結局，主張し続けた。宮田氏自身もそれを受け入れていません。彼が一緒に提唱したのだけれども，彼もまたそれを支援しないで，そのままズルズルッと連合の賃金決定基準になっていく。これに対し，もう絶望的になっていた。

そういうことで結局，2003年に鉄鋼労連が解散，造船重機労連などと基幹労連（日本基幹産業労働組合連合会）を結成します。解散後に労働組合で働いた連中が集まっていろいろな話をした際にも，彼は今までその種の会合に出てこなかったのですが，出てきた。出てきて，「大変申し訳なかった。勘弁してください」（笑）。

塚田　へえー。

――「許してください」。こういう言葉を述べています。それから何年かして亡くなられることになります。彼自身，今まで持ち上げられているときはいいのだけれども，そのように自分の主張が通らなくなってくると，実は非常に孤立感に包まれていましてね。その点では最後，非常にさびしい結末になった。そんな見方を私たちはしているのですが，偏向してから以後，塚田さんとは実際どんなお付き合いがあったのか，今日はちょっと聞いてみたいと思っていました。

塚田　金子研究会以外では，あまり話し合うことは……。あまりにも千葉さんとの距離がひどくなったものですから，向こうもあまり話し掛けてこなかった。

――やはりそうですか。

塚田　こちらも……。鉄鋼労連にはしばしば行って顔は合わせていましたけれどもね。そうすると，鉄鋼のデータをよく……。『鉄鋼労働年鑑』という立派な冊子ができていましたよね。ハンドブックか。

――あれはそうですね。彼がやったものです。

塚田　立派なものですよね。

総評の訪欧調査団と「構造改革論」

――「構造改革論」でイタリアへ行って例を聞いてきたというのがありますが，これは1951年の総評の訪欧調査団です。イタリア共産党などとも接触があったわけですね。

塚田　はい。

――もう一つは，同じ1960年，総評長期政策のところで，相原さんとか，堀江さんとか，井汲さんとか，いろいろ学者の協力があったけれども，向坂派は呼ばなかった。

塚田　呼ばなかったです。

――協会の分裂は1967年ですが，それ以前にも太田さんと向坂さんとはそういう何か違いがあったのか。

塚田　イタリアへ行ったのは1961年です。1960年安保が終わった後，社会主義国はもちろんですが，ヨーロッパの労働運動の中でも，日本の総評と全学連とはローマ字でそのまま通用すると言われるくらい，総評の安保闘争はそれなりに評価されたということもあった。太田さんはあまり外国へ行きたがらなかったのですが，1961年には行かれた。今から考えると，たぶん世界労連の招待だったのではないかと思います。小島さん，千葉さん，と私も，各単産の調査部長クラスを10人以上率いてヨーロッパへ行きました。ソ連にも寄ってフルシチョフに会ったという話を聞きましたが，それはあまり大事な話ではありませんで，フランスではブノワ・フラションという指導者。イタリアではパルミーロ・トリアッティという構造改革論を唱えた指導者。P．ネンニという社会党の指導者もいましたが，そういう人たちと交流をして帰ってくるわけです。

その前から太田さんは「構造改革論」に批判的でありましたが，イタリアへ行っていよいよ自信を得たらしいです。「改良主義であってはならない」。今の時代だと改良主義なんていう言葉が生きているかどうか。「改良で何で悪いの？」という世の中じゃないかと思いますが(笑)，当時は改良主義というのは「堕落の典型」のような蔑称で，非常にばかにされた。ですから，イタリアで，「構造改革論」は下手をすると改良主義に転落する危険があるという指摘も受けて帰ってきて，社会党への質問状というような形で，７項目ですか，「構造改革論」批判を出し，この論争に加わるわけです。

三池争議回顧

塚田　しかし，先ほども言いましたように，当時，原茂（1920～2007年）さんが炭労の委員長で三池のときも委員長でしたが，炭労にしてみると，三池がうまくいかなかったから新しく政策転換闘争を打ち出すわけです。政策転換闘争はいろいろなことを言っていますが，私の見るところ，割り切って言えば，エネルギーである石炭産業は国有化が正しいという路線だったような気がします。いま国有化なんて言うと評判が悪く，もう民営化一点ばりの世の中です。民営化以外に産業の生きる道はないような規制緩和の世の中ですが，当時はフランスでもドイツでもイタリアでも，国有化路線は決して否定はされていませんでした。金融であれ，製造業であれ，エネルギー産業であれ，重要産業であれば国有化はありうべしという雰囲気が，労働界の中には充満していたと思います。

ですから，炭労にしてみると三池がうまくいかなかった以上，やはり政策転換闘争に懸けていた。そして，この政策転換闘争は，直接構造改革論ではないのですが，構造改革と重なる部分が多いわけです。ですから，炭労をはじめとして総評系の各組合の委員長は，太田さんの「構造改革論」批判にはついていきませんでした。「構造改革論」批判に同調したのは向坂派の方ばかりです。第一線の活動家の中には向坂派の活動家がたくさんお見えでしたから，その人たちは構造改革に賛成ではありませんでしたが，幹部クラスは「構造改革をやってみたほうがいいんじゃないか。炭労の政転闘争もその一環じゃないの」と言う雰囲気でしたから，太田さんも炭労の政転闘争それ自身は否定したことは一遍もありません。炭労の政転闘争は正しいということで協力もしてきました。ですから，炭労の政転闘争と「構造改革論」と分けて考えようというのが太田さんの考え方でしたが，それは総評の中には通用しませんでした。総評の大勢は「構造改革論賛成」ということになった。結局，これが太田さんの1966年辞任の最大の原因ではないかと思います。

私も当時見ていて，「どうも太田さん，総評の中で議長を務めるのはいささか無理があるのではないか」とも思いましたから，「この辺で」と太田さんに意見を具申したことをよく覚えています。私が言ったから太田さんが辞めたということではない。もう辞め際を考えていらっしゃったと思います。

――三池闘争では，その最終段階で太田さんが乗り込んで説得に行くんですよね。

塚田　そう。最終段階はね。

――あれは総評内において十分議論をされ，総評を代表する形で，とにかく闘争を終結させようということで行くわけですね。それは太田さんの考え方というよりも，総評全体の考え方として統一されたものだったのでしょうか。

塚田　これは微妙なところです。三池闘争は始まったときに斡旋案が出ます。始まったときに，もう斡旋案が出ている。これは首切り容認の斡旋案です。ですから，二転三転するのですが，炭労はこの斡旋案を途中でのみかけます。しかし，三池は断固のまない。そして，ここが日本の企業別組合の特色ですが，三井鉱山はほかに５山あり，北海道とか，九州にも山野という炭鉱があります。ほかの５山と一緒に６つの山で三鉱連という企業連になっている。炭労の下に三鉱連があり，三鉱連の下に三池労組がある。ところが，炭労は建前としては単一組織だということになっていますから，支部に直結する組織です。三鉱連とかそういう企業連は，発言権はあるかもしれないけれども決定権はないような，微妙な企業連の位置付けです。

これは総評をつくるときにも問題になりました。鉄鋼労連で言えば，鉄鋼労連があり，そして室蘭があり，釜石があり，八幡があるとなっていたら，新日鉄労連は一体どういう位置付けなのかというのはなかなか難しい問題です。鉄鋼労連も企業連も単位組合の個々の事業所も，１本の路線でつながっているときには問題ありません。しかし，企業連が動揺する。特に，合理化ですよね。賃金でもそういうことがあり得るのですが，三鉱連という企業連では，ほかの５山はもう希望退職で終わってしまう。そうすると解雇に反対の三池だけが孤立する。こうなると，炭労としてはどう指導していいのか，迷った。

ですから，途中で「もう呑みたい。斡旋案を受け入れざるを得ない」という意見を炭労本部がいい出し，臨時大会を10日間ぐらいやったことがあります。なかなか決まらないわけです。ほかの組合に「もう三池を見捨てていいのか」と言われると，「そうはいかないね」ということで，ずいぶんもめるんですよね。炭労，三鉱

連，三池労組という関係で，それでは総評はどこを支持したらいいのか。総評は原則的に言えば産業別自決ですから，炭労が言うとおりにしなければいけない（笑）。規約上は。三鉱連の言うことも聞く必要はないし，三池の言うことも聞く必要はない。「炭労本部の言うとおり」というのが規約上の建前です。しかし，現地はそんなことでは収まりません。

それで太田さんはずっと三池，三池という形で，炭労本部を無視するような形だった。だから途中の臨時大会では，炭労の原委員長と太田さんと別々のことを提案するような一幕もありました。ところが，やはり炭労の代議員はどうしても三池に同情しがちです。ですから，炭労大会は結果的に太田さんが言うとおり，三池が言うとおりという形で長期の闘争になっていくわけです。

これが解決になった直接のきっかけは，それまでの岸内閣から池田内閣になったということですよね。池田首相が決断をした。「ホッパー決戦」（1960年）というのがありましてね。

――ありましたね。

塚田　「ホッパー」というのは貯炭槽のことです。三池の組合員と応援の組合員２万人対警察官１万人が，貯炭槽を挟んで衝突するかもしれない。ここを占拠していると，第２組合員が掘り出した石炭もつまってしまう。そのときに中労委（中央労働委員会。全国単位で労使関係の紛争解決を目的とし，厚生労働省の外局として設けられた行政委員会）が割って入り，中労委斡旋案で収拾ということになりました。ですから，炭労との関係はなかなか微妙でした。三池の大会ももめましたが，「あれだけ一緒に闘った太田さんがいうから仕方ない」とあきらめてくれました。向坂先生も収拾にOKしました。

太田さんと向坂さんのこと

――1960年代に，太田さんは向坂逸郎氏に対し，どのような感じを持っていたのか。

塚田　向坂先生を非常に尊敬していましたから，ほとんど悪口を言ったことはありません。向坂協会がなぜ分裂したのか，私もよく分からない。書いたものを読めば多少分かるような気もするのですが，説をなす人は，「九大の若手グループが嶋崎譲さんという学者の方を先頭にして向坂派を批判し，分裂に追い込んだのだ」。だから，太田さんはあの分裂のとき，社会主義協会の会合には直接出ていませんよね。それで最後に担がれるだけは担がれました。

担がれて，向坂派と太田派に分裂はするのですが，向坂派のほうに献身的な活動家が多かったのです。社会党の議員にしてみると，向坂派の若者くらいよく働く人間はいません。選挙のときに本当に向坂派は頼りになるというのが議員集団の本音です。ですから，向坂派にぐんぐんなびいていき，そのため，とうとう先ほど言った総評の社会主義協会「いじめ」に遭うことになります。それから，向坂派はおとなしくなりました。

――一般的には向坂のほうが理論重視で，太田さんのほうが現場重視というか，運動重視というか，そういう違いがあるというようなことが言われますが，そうでしょうか。

塚田　まあ，それはあるでしょう。太田派の影響力が強かったのは，官公労の中でもどちらかというと国労，全農林，こういったような組織です。各単産，官公労はもうほとんど向坂派の影響を受けていましたからね。民間労組では両派とも影響力は強くはありませんでした。

――当時，炭労闘争を指導していたのは灰原茂雄さんという，三池労組の書記長でしたよね。あの方は，協会内の立場はどちらですか。

塚田　協会では講師役をずっと務められたと

思います，向坂協会で。

――向坂派ですか。

塚田　向坂派。

――向坂さんのかなり優秀なお弟子さんだったのではないですか（笑）。

塚田　それから，三池と太田さんとの関係はよくなくなっていきます。

総評内の役割分担など

――先ほどから，事務局長のポストをめぐっての対立が激烈だったということをおっしゃられるのですが，その一方で先生が非常に近かった太田先生は議長の立場におられた。太田―岩井ラインと呼ばれてラインとしてつながっているのは確かですが，一方で議長と事務局長の役割分担的なところは，当事者の方々はどのように意識されていたのか。つまり，ここまでは議長であり，ここからは事務局長であるという，そのようなところを教えていただければと思います。

塚田　典型的なのは60年安保，三池でしょう。『総評40年史』に，安保は岩井の分担，三池は太田の分担と書かれていますが，それほど割り切れるかどうか。太田さんもずいぶん東京にいらっしゃいましたし，安保闘争にもかなりタッチをされていたと思います。

最後のところに書いておきましたが，叙勲を受けていないんですよね。叙勲は組合幹部にとってはどうでもいいようなことかもしれませんが，同盟系の幹部は叙勲が大好きでね（笑）。「あいつが勲一等なら俺は勲二等だね」とか何とか，年中そんな雑談をやっている。総評系はそういうことはほとんどありません。

――いや，鉄鋼労連の委員長は，三戸国彦と宮田義二氏が２人とも勲章を受けています。

塚田　えっ，もらいました？　へえー。槙枝，富塚氏ももちろんもらっていませんが，もらったのは私鉄総連の黒川武氏ですね。自治労の真柄栄吉氏もこの間，もらいました。太田さんが亡くなったときにある人が，「政府が叙勲と言ってきたら困るな」（笑）。私はもらってほしくないけれども，家族がいらっしゃいますからね。奥さんなり子どもさんなりが「いやいや，その勲章，欲しいよ」と言われたら，これは阻止できませんよね（笑）。黒川さんなども，もらったときは大喜びで（笑），私鉄総連を挙げて祝勝会をやっていました。

――そうすると，安保は岩井で三池は太田というような役割分担は，各代というか，各ラインによってそれぞれ違うわけですか。統一職務分担といった意識は，むしろはっきりはしていなかった。

塚田　機関決定として，あなたは何，あなたは何と決めたとは思いません。仮に決めたとしても太田さんはどこにでも口出す人だから，決めても意味がない（笑）。

――歴代の各ラインを見ていると，どうもその気配が見えてきます。では，自然発生的に分担されていくようなものだった。

塚田　そういうことだと思います。

――下呂談話（1959年，岐阜県下呂町で開催中の合化労連定期大会に出席していた総評太田議長，岩井事務局長が記者会見で発表した談話）がありますよね。その後，合化労連の中で政党支持自由化という方針が決まり，路線統一問題でも「合化４方針」の中で全的統一ということで，共産党系も排除しない。そういう発想はかなり一貫しているような感じがします。一つの流れと考えていいのですか。

塚田　ええ。経歴だけで言うと，先ほども言いましたように宇部窒素という地方の工場の出身で，当時，社会党に入党し，そしてどちらかといえば反共民同として育った一面はあります。しかし，東京へ出てきてから高野さんの指

導もあり，「社共共闘は当たり前じゃないの。労働組合は社共共闘なしには成立しないよ」という考え方。これは高野―太田という対立があるにもかかわらず変わりませんね。ですから，太田―岩井時代になり，共産党の影響力が強い全日自労，医労連，国公労連，全自運，こういう組合を総評の加盟組合にした。少し前に全自動車などもそうでした。いわゆる，そういう左派系と言われる組合を総評に加盟承認しただけではなく，２人に役員のポストを与えています。だから，全日自労と国公労連からは絶えず総評の常任幹事が出ている。そういう形で社共共闘は，長い一生を通じて変わることはなかったと思います。

――日鋼室蘭と尼崎製鋼の，いわゆる「ぐるみ闘争」。先ほどの話の中にありましたように，指導部が代わった，つまり太田―岩井ラインに代わることにより，いわゆる大量解雇反対闘争などに対し，そういう闘争方式が総評の指導として行われることはなかったと見ていいわけですね。

それから，三井・三池闘争です。いろいろ複雑な展開を見せていましたが，日鋼や尼崎の「ぐるみ闘争」で採用されたさまざまな戦術，例えば主婦の会，あるいは町ぐるみの共同闘争，そういうものは三池の闘争にも結構生かされているわけです。

塚田　生かされています。

――ですから，「ぐるみ闘争」は高野さんの発案といいましょうか，指導によって実践されたとはいえ，そして政治主義的な側面があったがゆえに批判されるべき要素があったとはいえ，やはり日本の労働組合において創造された一つの戦略・戦術として，それなりに正当に受け止めなければいけないのではないだろうか。そして，それは太田さんの指導の下での三池闘争でも，あれだけの全国的な共同闘争が組織され，また，全国的な支援が受けられるという状況の中で，やはり一つの闘いとしての力を発揮した。こう見るべきではないかという感じがするのですが，その点，塚田さん，いかがですか。

塚田　そうです。それはそのとおりです。ですから，高野さんの「町ぐるみ・村ぐるみ」という闘いをまずいと言う批判は，太田さんからはほとんど聞いたことがありません。おっしゃるように，その後の闘争にも，三池に限らず，あちこちで生かされていますからね。

――分かりました。

――そういう意味では，例えば石田雄さんのような市民主義の人たちが，わりあいに「ぐるみ闘争」を批判的に議論していましたね。だから，社会党とは少し違う脈かもしれません。

――今の話は，最近の社会運動的労働運動の視点からも多少，再評価されてきているという面はありますよね。

――太田さんは太田協会の立ち上げのときに，そのみこしの上にだけ乗っかった。端的に言えばそういう理解でよろしいですか（笑）。

塚田　協会分裂のときには出席もされていなかったと思います。

――先ほどその話を聞いたので。

塚田　だから，（島崎譲さんなど），九大の若手グループの独走だったという説もあるくらいですが，私は協会のことはさっぱり分からないんですよ，入ったこともないし。太田さんには入れとも言われなかったしね（笑）。

――お話にあった笠信太郎氏は大原社会問題研究所の元所員でして（笑）。私が申し訳ないと言うこともないのですけれど。

先ほども話に出た舟橋尚道先生は，私が研究所に入ったときの所長でした。それから，話が出ました宇部窒素の労働組合の資料は私どもの研究所に入っており，いま整理がほぼ終わりかけているところです。それと名前が出ました小

島健司さんですが，93歳でまだまだご健在のようです。

まだいろいろお聞きしたいことがおありだと思いますが，時間になりましたので，今日はこれぐらいにさせていただきます。どうも本当にありがとうございました。（完）

法政大学大原社会問題研究所
ワーキング・ペーパー（旧調査研究報告）のご案内

ワーキング・ペーパーは，教育研究機関からのお申し込みに限り，無料で配布しております。
個人・一般の方には実費で頒布しています。入手ご希望の方・機関はご連絡ください。

№.	タイトル	発行年月
53	最新刊 持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.4 ―倉敷市政と繊維産業調査および環境再生・まちづくり調査報告―（500円）	2015年 3月
52	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.3 ―倉敷地域調査および桐生繊維産業調査報告―（500円）	2014年 4月
51	棚橋小虎日記（昭和十八年）（500円）	2014年 1月
50	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.2 ―繊維産業調査および公害病認定患者等調査報告―（500円）	2013年 4月
49	電産中国関係資料（300円）	2013年 3月
48	協調会の企業調査資料（300円）	2012年 4月

法政大学大原社会問題研究所　〒194-0298　東京都町田市相原町 4342
tel:042-783-2305　fax:042-783-2311　e-mail oharains@adm.hosei.ac.jp